

1年のスタート

元旦は春夏秋冬365日のスタートだ。誰もが出発点に立ったとき、これから自分が活躍するだろう世界を、希望を持って展望する。登山なら山容と山頂を眺め、航海では水平線のかなたに思いをはせる。こうしてこの1年を、希望という心の躍動をもって迎えようではないか。

古人は言う「目覚めしもの夢こそ希望なれ」。「希望は、風雨の夜に早くも朝の光りを射す」。そして「希望が人間をつくる——大いなる希望を持つ」と。

人間は、どのようにして希望という心のエネルギー源を得たのだろうか。それは十何万年の経験によって、希望→創造→達成の喜びを知り、物事は変えられるという信念を持ったこと。思ったように変えられた喜びが次の希望の源になることを、人生の生きがいと知ったからだろう。

希望という心の躍動をもって

だが、楽観主義者はどんな困難の中にも希望を見つけて、悲観主義者はいかなる機会に恵まれても希望を持ってない。気持ちの持ちよう、幸・不幸の道は大きく分かれてしまつた。

紀元前8世紀のギリシャの詩人ヘシオドスが伝えるギリシャ神話がある。プロメテウスが天上の火を盗んで人間に与えてしまった。怒ったゼウスは、代償を人間にも支払わせようと考え、鍛冶の神ヘファイストスに粘土で女を造らせ、パンドラと名づけて地上に下した。このとき彼女が神々からの土産として持参したのが「パンドラの箱」だ。ところが彼女は好奇心からそのふたを開けてしまい、あらゆる災いが飛び散っていった。ただ、急いでふたを閉めたので、「未来の全てを予想できる」という大災厄だけが世界に出現らずに取り残された。

こうして希望は人間のものになったという。年齢に関係ない。米国の詩人サミュエル・ウルマンは言う。「青春とは心の若さである。信念と希望にあふれ、勇氣にみちて、日に新たな活動を続けるかぎり、青春は永遠にその人のものである」。ギリシャ神話がある。プロメテウスが天上の火を盗んで人間に与えてしまった。怒ったゼウスは、代償を人間にも支払わせようと考え、鍛冶の神ヘファイストスに粘土で女を造らせ、パンドラと名づけて地上に下した。このとき彼女が神々からの土産として持参したのが「パンドラの箱」だ。ところが彼女は好奇心からそのふたを開けてしまい、あらゆる災いが飛び散っていった。ただ、急いでふたを閉めたので、「未来の全てを予想できる」という大災厄だけが世界に出現らずに取り残された。

（東京大学名誉教授 和田昭允）

平成 30 年
1 月 1 日

6次の隔たり

現在、地球上では1年間に1億3千万人が生まれ、6千万人が亡くなっている。差し引きすると、7千万人増えている。1分に137人、1日に20万人の割合だ。そして2016年の世界人口は約74億人になった。

これは大まかに言って、縦・横・高さが各2倍の箱に詰められた砂粒（粒の大きさは1立方センチと仮定）の数は、また、億という数字の大きさは、東京・鹿児島間の距離が約1億センチだということが実感させてくれる。

この途方もない世界人口で、「友達の友達を通して6人つながれば、74億のすべての人と間接的な知り合いになれる」といのが「6次の隔たり」(Six Degrees of Separation)と呼ばれる概念だ。

以前のコラムで13年7月30日付にも紹介したが、改

74億人の「小さな世界」示す

めて具体的に説明したい。例えば、私(1)の親戚(2)が外務官僚(3)と親しく、その外務官僚が大使として南米のチリに赴任し、チリの外務省の役人(4)と知り合う。

その役人の友人に実業家(5)がいて、その実業家がパタゴニアのある寒村の村長さん(6)を知っている。紙を送って下さい」という内容だ。

果たして、実験の結果はどうか。届くまでに経由した人の平均数は、5・83人だけだ。

ここで、たとえに取り上げた仲介者はいずれもごく普通の人だ。特別なものではない。

この実験は世界規模ではなく米国内である点、追試に失敗した点などいろいろ問題が指摘されている。しかし、6次の隔たり概念の先駆けとして、歴史にとどめられるべきものだと思う。

（東京大学名誉教授 和田昭允）

平成 30 年
1 月 9 日